2023年度全学統一入学試験問題

国　　語【看護学部】

（2月3日）

開始時刻　　午後1時00分
終了時刻　　午後2時00分

※　数学の問題は、本冊子の左開きのページにあります。

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 国語か数学のどちらか1科目を選択し、該当する解答用紙を切り離して解答してください。2科目とも解答した場合は、すべて無効となります。

   国　　語　1～15ページ

4. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督員の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

   ①　受験番号欄

   受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

   ②　氏名欄

   氏名とフリガナを記入してください。

5. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、［10］と表示のある問いに対してⓒと解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄のⓒにマークしてください。

   (例)

10	ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ

6. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、**問一**～**八**に答えなさい。

かつて、夏目漱石や森鷗外などの文学作品が、社会全体で共有すべき価値観を提供していた時代がありました。全国の小学生が四年生になると新美南吉の『ごんぎつね』を読み、世代を越えて同じ感性を共有することが道徳的な「正しさ」を共有する役割を担ったのです。それらの作品は今もまだ（少なくとも本書の執筆時は）教科書に残っていますが、実質的な「道徳的規範」としての機能は現在どのぐらい残っているでしょう。かつては、それらの作品による感性の共有が実際の社会で他人と関係を取り結ぶ際のお手本になった場面もあります。イタズラだけれど、人知れず改心して善い行いをしようとする「ごん」が勘違いゆえに殺されてしまう切なさは、子どもたちに自分自身の振る舞いを考えさせるきっかけになっていたのです。

現代の子どもたちにとっては、しかし、『ドラえもん』や仮面ライダー、ゲームなどのサブカルチャーの方が「感性の共有」にシ(ア)する役割を担っているように思われます。「神作品」は、学校で読まされる古典文学より、ときに世代ごとに分断される流行のサブカルチャーに多く見出されるのです。みんなが同じ作品を観(み)ることで他者との感性の共有が実現されているのだとすれば、その社会的な役割は、ある時期以降、サブカルチャーのメディアが担うものになりました。

[X]ことで同じ感性をもつという点では、教科書的な物語とサブカル的な物語の違いはありません。しかし、A両者には明確に異なる点があります。それは「押しつけがましさ」の違いです。サブカル的な作品については「これは神／これはクソ」という評価がなされても、基本的にその判断は「人それぞれ」の範疇(はんちゅう)に収まります。その枠を越えて価値判断を押しつける行為は、たとえ批評家であったとしても強く戒められることになるでしょう。オタク文化が「価値の多様性」の上に成立するものであることはしばしば指摘されますが、全体を貫く高次の価値のシヒョウ(イ)が存在することを許さないという特徴をもっていると思われます。

それに対して教科書的な物語には「この作品を読むべき」という規範性が強く働いています。『ごんぎつね』をどのように解釈するかについては「個性」の枠内で、ある程度の差異が許容されます。それでも、作品の前提を覆すようなエキセントリックな解釈が受け入れられることはないでしょう。そして、その物語は最初から「読まなければならない」ものとして位置づけられているのです。教科書ではまた、必ずしも「[Y]」とは見なされないような「感性」の共有が求められる場合もあります。

森鷗外の『舞姫』は、高校の現代文の教科書に載っていますが、出世のため恋人にお金を積んで別れてもらうことを物語るこの作品の感性は、時代的な限定の中でのみ理解されうるものでしょう。そうした感性を「歴史」として共有するのが無意味だとは思いませんが、それは「人それぞれ」という枠組みには収まりません。現代的な共感の外におかれるものの共有は「教養」としてのみ成立すると考えられます。同じ物語を社会全体で共有する

ことを目指す社会運動を「教養主義」[B]といいますが、教養主義では作品を通じて望ましい人格を育てることが目的とされていました。「教養＝文化（culture）」は「耕す（cultivate）」と同じ語源をもつ言葉ですが、それを身につけることで望ましい人間を作り上げることが目指されていたのです。

教養主義とサブカルチャーは、こうして、読み手の「私」の変容を促すものであるかどうかで明確に分かれることになります。教養主義における作品の共有では「素晴らしい」とされる作品をみんなで共有することによって個々の「私」を変容させ、理想的な人格を陶冶することが目的とされました。それに対して、サブカルチャーにおける作品の共有では「私」の変容はまったく問題になりません。自分が好きな作品を「好き」といい、好きな者同士でコミュニティを作る文化では、作品の「神聖性」が問題になる場面であっても、それを鑑賞する「私」が変容することは想定されていないのです。

例えば、「神」と賞賛されるアイドルや作家が「私」には許容できない理不尽な振る舞いをしたと考えてみましょう。そのとき「私」の価値観が「神」によって揺るがされることは、サブカルチャーの消費においては、ほとんどありません。そうした場合にはむしろ、「神」の方がその超越的な地位から引き下ろされるのが通例と思われます。対象となるアイドルに不倫や麻薬使用、ＤＶなどがハッカク[ウ]した場合、「絶対」と言われた「神」であっても「裏切られた」と比較的簡単に放棄されることになるでしょう。「神」の「無実」を信じて待つことはできるかもしれませんが、「神」による理不尽な振る舞いが理不尽なまま受け入れられることはないのです。むしろ、アイドル＝偶像となる人々の方が、崇拝者の歓心を買うために常に努力し、崇拝者に諂（へつら）うことを要求されているという方が現実に近いと思われます。「神」は「私」の価値観を揺るがすものではなく、「私」の理想に合致するものと見なされているわけです。

こうしたメンタリティの変化は、しばしば「大きな物語の終焉（しゅうえん）」と表現されます。これは、もともとフランスの思想家ジャン＝フランソワ・リオタール（一九二四―九八年）が使った表現ですが、社会全体で共有される絶対的な価値がなくなった後の「物語」の消費のされ方が変化したことを示すものとして、主に文化批評の分野で定着しました。この表現を一九八〇年代以降の「オタク化」を説明するものとして用いたのが、東浩紀の『動物化するポストモダン』（二〇〇一年）です。東は「大きな物語」を共有（しようと）するツリー型の物語消費に対して、それぞれの「私」が個々の「小さな物語」を紡ぎあげる[C]データベース型の物語の消費の仕方を区別しました。それが一九八〇年代以降のオタク文化における物語消費の特徴だというわけです。

社会全体で同じ物語を共有することを目指す「大きな物語」は、教養主義の衰退とともに効力を失っていきました。代わりに台頭してきた「小さな物語」では、「私」が消費の主体として位置づけられます。東のいう「データベース型消費」においては、作品の設定と世界観さえ示されれば、後は「私」が読み込むことで「小さな物語」を消費できるといわれました。作品の原作にはもちろんオリジナルの物語がありますが、同一のオリジナルを

共有することだけが作品の消費ではありません。作品の消費者が、原作の世界観の設定を引き継ぎながら、別の新しい物語を自分で紡ぐ「二次創作」が盛んに行われるようになっていきます。「神作品」であっても、あるいは「神作品」であるからこそ、［　Z　］を「私」の側で読み込んで補う必要があると見なされたのです。

鑑賞者の想定を著しく逸脱するものは、ときに「公式」の物語であっても鑑賞者の側から激しい批判を浴びます。「私」の理解を超えるような設定は、「私」を変容させるものとして機能するのではなく、「私」の理解に準拠することを求められるのです。作品に対する「私」の思い入れが強ければ強いほど、望ましい物語のあり方が作品に期待されることになるでしょう。データベース型の消費では、こうして、オリジナル＝公式に対する一定のリスペクトを残しつつも、「私」の好みに合わせて「小さな物語」を作ることに重点がおかれることになるのです。

（荒谷大輔『使える哲学　私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一　傍線部ア～ウと同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 1 、イが 2 、ウが 3 。

ア　シ|する

ⓐ 計画通りにジッシ|する
ⓑ シ|キュウ来てほしい
ⓒ 献身的にホウシ|する
ⓓ 子どもにトウシ|する
ⓔ 新車にシ|ジョウする

イ　シヒョウ

ⓐ 新刊書をショヒョウする
ⓑ 道路ヒョウシキに従う
ⓒ 舟がヒョウハクする
ⓓ ハクヒョウを踏む
ⓔ ジヒョウを提出する

ウ　ハッカク

ⓐ カク|ショウを得る
ⓑ 陰でカク|サクする
ⓒ カク|チョウの高い詩
ⓓ ゴカク|に渡り合う
ⓔ 前後フカク|に陥る

問二　空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 4 。

ⓐ 正しさを身につける
ⓑ 物語を共有する
ⓒ 社会的役割を果たす
ⓓ 主体的に関わる
ⓔ みんなで一緒に学ぶ

問三　傍線部A「両者には明確に異なる点があります」とあるが、両者にはどのような違いがあるのか。その説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 5 。

ⓐ　サブカル作品は世代ごとに分断しており共通していないが、教科書的な物語は世代を通じて変わることなく同様であるという違い。

ⓑ　サブカル作品は作品の質が安定せず評価が分かれてしまうが、教科書的な物語は誰もが同様の評価を下すことができるという違い。

ⓒ　サブカル作品は「人それぞれ」の解釈を認めてくれるが、教科書的な物語は一切の個人的な解釈を許容してもらえないという違い。

ⓓ　サブカル作品はそれを読み恣意的に判断を下すことができるが、教科書的な物語はそれを読み感性の共有が求められるという違い。

ⓔ　サブカル作品は価値が多様化し相対主義に陥ってしまうが、教科書的な物語は絶対的な正しさを共有することができるという違い。

問四　空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 6 。

ⓐ　一義的

ⓑ　画期的

ⓒ　普遍的

ⓓ　独創的

ⓔ　即興的

問五　傍線部B「教養主義」とあるが、この説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 7 。

ⓐ　教養主義は、歴史を学んでみんなで共有することにより、理想的な人格を形成していこうとするものである。

ⓑ　教養主義は、現代的な共感では身につかない教養によって、人格をきたえて育て上げようとするものである。

ⓒ　教養主義は、いつの時代でも誰もが共感できる古典文学を読むことにより、人格を育てようとするものである。

ⓓ　教養主義は、小さな物語を社会で共有することにより、社会全体が精神的に一体化しようとするものである。

ⓔ　教養主義は、神作品をみんなで鑑賞することにより、世代を超えて同じ感性を共有しようとするものである。

問六　傍線部C「データベース型の物語の消費の仕方」とあるが、これはどのような消費の仕方なのか。その説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 8 。

ⓐ「私」が変容することを目指すのではなく、「私」の理想に合うように物語を創作し消費しようとする。
ⓑ「私」が消費の主体となるだけではなく創作の主体にもなり、原作者と競合しながら消費しようとする。
ⓒ「私」の理解を超えるような設定は不合理なものとして否定され、理解できるものを消費しようとする。
ⓓ「私」の読み込みによって「大きな物語」を好みに合う「小さな物語」に分解して消費しようとする。
ⓔ「私」の価値観に準拠しないオリジナル＝公式はリスペクトすることなく批判的に消費しようとする。

問七　空欄 Z に入る表現として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 9 。

ⓐ オリジナルの物語とは全く関係のないこと
ⓑ オリジナルの物語よりもより良くすること
ⓒ オリジナルの物語の設定をひっくり返すこと
ⓓ オリジナルの物語として認められていること
ⓔ オリジナルの物語で描かれていないこと

問八　本文の内容と合致しているものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 10 。

ⓐ「神」と賞賛されているアイドルや作家は、教養＝文化を身につけておらず理不尽な振る舞いをすることがある。
ⓑ 教養主義の衰退とともに「大きな物語」が終焉を迎え、活字媒体から映像媒体へとメディアの中心も移行した。
ⓒ 現代の子どもたちにとっては、サブカルチャーのメディアを通じて、他者との感性の共有が実現されている。
ⓓ かつては教科書に載っている小説家などが憧憬（しょうけい）の的であったが、いまはサブカルチャーのアイドルに変わった。
ⓔ 夏目漱石や森鷗外などの文学作品は道徳的な正しさを説いたものなので、現代文の教科書に載せられていた。

二

次の文章を読んで、**問一**～**六**に答えなさい。

インターネット上のサービスの中で、特にＳＮＳが社会に普及して後に出現した事象として「炎上」がある。これこそ、日本のネット社会における新たな「世間体」が生み出す典型的な状況であるといえるだろう。

炎上とはある特定の人が不穏当な（あるいは不穏当と受け取られうる）発言をネット上でしたことへの人々の反応として、あるいは単純に受け手が炎上の対象となる人物や法人を気に入らないといった理由で、その対象に対して批判的な投稿や時には誹謗（ひぼう）中傷する書き込みなどを行い、多くの受け手がそれに呼応することによって、その批判的な内容や誹謗中傷を含む投稿が指数関数的に膨れ上がり、当該事象でのトラフィック（注1）が顕著に増大することだ。

もちろん、それ自体が社会そのものであるインターネットにおいてこそ、不法・違法な発言は慎まれるべきことで、誹謗中傷にあたる発言に対しては場合によっては民法の不法行為に基づく損害賠償請求に発展したり、あるいは名誉棄損罪等の刑罰の対象となったりすることもありうる。だが、それ以上に炎上の対象となった個人や組織が、バッシングを受けることによって［　W　］を待たずに［　X　］を受ける点が、より炎上の本質だといえるだろう。そして中には、それほどのバッシングに発展するほどの内容であるか疑わしいものも多く存在する。

なぜ、人はそれほどまでにバッシングするのか。過度にバッシングする人の心の中には、おそらく大きな空虚があるのだろう。空虚であるからこそ、人をあげつらうこと、攻撃することで精神的なヘイコウ（ア）を保とうとするのである。

そうした空虚さの代償といった面と合わせてバッシングの背景の要素となるのが、「インターネット上の匿名性」（A）と「正当性」（B）だ。インターネット上の匿名性とは、一見してネット上、たとえばＳＮＳ上で書き込みや発信を行う際に、ネット名やニックネームを用いて、書き込む人が個人的な素性を明かさずにそれを行える点にある。もちろんこうした「匿名性」は、時には発信者自身を悪意ある他者から守る機能も果たすのだが、攻撃する側となった場合に歯止めが利かなくなることにもつながる。

この「匿名性」と「攻撃性」の構造は道路上における「煽（あお）り運転」を生み出す構造とも似たところがある。「煽り運転」も、自動車という周りに歯止めをかける人がいない、あるいは歯止めが限られる閉じられた空間において、運転者が「気に入らない」と思った相手に仕掛けるものだ。そして多くの人は「煽り運転」をしても、自分が後々に特定され、制裁を受けることはないと無意識に考えている。

インターネット上の「炎上」に話を戻すと、その「匿名性」とは、実はさほど担保されていない。なぜならＩＰ（注2）などの発信者情報は、契約したプロバイダ（注3）などのデータ（パケット）が通過したサーバー等に残っており、そうした情報と個人情報を突き合わせることで比較的容易に誰が発信者か特定

可能だからだ。

Y　ネット上で過度な批判や誹謗中傷をする人は、自分が特定されて書き込みによって制裁を受けることがないと考えているからこそ、そうした行為をしていることになる。また「正当性」とは、「過度な批判や誹謗中傷をしても良い」「（炎上の）対象となった相手は、そうした制裁を受けても仕方がない」と少なくとも書き込みを行う人は信じている、その過信を生み出す要因のことをいう。

これは私刑が行われる構造でもあり、むしろ私刑そのものともいえるだろう。同様の構造をもとに顕在化した例では、中世ヨーロッパで横行した「魔女狩り」がある。魔女狩りは権力者や教会が主導した形で行われたと思う人も多いだろうが、実際にはその源泉と原動力は一般の人々の側にあった。

一般の人々が「魔女」という幻想を生み出し、その「魔女」とされた無実の人の多くは、悲惨な末路を辿ることになる。これは、信仰するキリスト教や神なるもの、そしてそれらを基盤とする社会を侵害する存在から防御するための「正当性」があると信じていたからこそ、そうした非合理かつ凄惨な行為が行われたという面もあるだろう。

「炎上」を考える際にもう一つの要素がある。それは「匿名性」と紐づいた「非罰性」の幻想だ。「匿名性」があるからこそ誹謗中傷を書き込んだ自分は、誰からも罰せられることがないと信じることとなる。この「匿名性」がまやかしであるのは先に述べた通りだ。したがって「非罰性」も幻想であるということになる。いずれにしろ、こうした「匿名性」「正当性」「非罰性」があると信じるからこそ、過度な批判や誹謗中傷を含む書き込みが行われ、それが一気にインフレーションを起こすのが「炎上」だといえる。

そして「裁く」特性はインターネット上だけの特異な事象ではまったくない。Z　日本社会がカカえている負の側面が、インターネット上ではびこる「匿名性と正当性」を信じる人々の中で拡大され共有されているというのが実態に近い。こうした「裁く」という傾向は世間体を考える上で、現実の日本社会そのものにおいて特に顕著であり、由々しき側面のひとつでもあるのだ。

（犬飼裕一『世間体国家・日本　その構造と呪縛』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

（注1）　トラフィック――通信回線やネットワーク上で送受信される信号やデータのことや、その量や密度のこと。

（注2）　IP――インターネット上でコンピュータ同士が通信を行うために定められた通信規約。

（注3）　プロバイダ――インターネットの接続サービスを提供する業者。

問一　傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 11 、イが 12 。

ア　ヘイコウ

ⓐ　監督がコウテツされた
ⓑ　巧みにキンコウを保つ
ⓒ　些細なことにコウデイする
ⓓ　敵にコウフクを呼びかける
ⓔ　民族のコウボウをかけた戦い

イ　カカえて

ⓐ　暖衣ホウショクの時代
ⓑ　ドウホウが結束する
ⓒ　重職からホウメンされる
ⓓ　手厚くカイホウする
ⓔ　ロウホウが舞い込む

問二　空欄 W ・ X に入る表現の組み合わせとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 13 。

ⓐ　Wが「法的な制裁」、Xが「物理的な制裁」
ⓑ　Wが「経済的な制裁」、Xが「心理的な制裁」
ⓒ　Wが「法的な制裁」、Xが「社会的な制裁」
ⓓ　Wが「経済的な制裁」、Xが「法的な制裁」
ⓔ　Wが「法的な制裁」、Xが「経済的な制裁」

問三　傍線部A「インターネット上の匿名性」とあるが、この説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 14 。

ⓐ　インターネット上の匿名性は行為に歯止めを利かなくしてしまうので、ただちに個人情報を公にすることが求められている。
ⓑ　インターネット上の匿名性は不穏当な発言に対して過度にバッシングを行い、炎上をもたらすことになる最大の原因である。
ⓒ　インターネット上の匿名性は他者に過度な批判や誹謗中傷を行うことに拍車をかけ、結局大きな空虚をもたらすことになる。
ⓓ　インターネット上の匿名性は他者から自分を守る機能を果たす半面、過度にバッシングを行う原因にもなる諸刃（もろは）の剣である。
ⓔ　インターネット上の匿名性はまったく担保されていないのに、情報の発信者を特定することはできないと誰もが思っている。

問四　傍線部B「正当性」とあるが、この説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 15 。

ⓐ　正当性とは、不穏当だと自分が受け止めた対象や気に入らないと思った対象が制裁されても仕方がないと考える要因である。

ⓑ　正当性とは、インターネット上でも違法な発言は許されるべきでなく、自らが法に基づき処罰してもよいと考える要因である。

ⓒ　正当性とは、無実の人だと思いつつも凄惨な行為を行ってしまう根拠になるだけでなく、罰を受けないと考える要因でもある。

ⓓ　正当性とは、現代版の魔女狩りに理屈を与え、自らが行っていることは絶対的な神から賦与された権限だと考える要因である。

ⓔ　正当性とは、「炎上」をもたらす原因になるかもしれないが、「炎上」は世間から託された行為であると考える要因でもある。

問五　空欄 Y ・ Z に入る表現として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちからそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。ただし、同じ選択肢を選んではならない。解答番号は、Yが 16 、Zが 17 。

ⓐ　たしかに

ⓑ　むしろ

ⓒ　たとえば

ⓓ　まして

ⓔ　いずれにしろ

問六　本文の内容と合致しているものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 18 。

ⓐ　「匿名性」「正当性」「非罰性」はいずれも幻想であるので、「炎上」自体も仮想現実の世界の中での出来事である。

ⓑ　日本のネット社会では新たな「世間体」が生み出され、かつての「世間体」にはない悪い面が注目されている。

ⓒ　批判的な投稿や時には誹謗中傷する書き込みに対して受け手が反応することで、投稿が漸増することになる。

ⓓ　「煽り運転」が一人で運転している時に起こるように、インターネットも一人の時に過度な批判をしてしまう。

ⓔ　日本社会では「裁く」という傾向が目につくが、その象徴的な出来事がインターネット上の「炎上」である。

三

次の文章を読んで、**問一**～**六**に答えなさい。

ロシア文学のドイツ語翻訳家、スヴェトラーナ・ガイヤーの生涯を描いたドキュメンタリー映画『ドストエフスキーと愛に生きる』の中に、忘れ難い一場面がある。タイプ打ちされた原稿の束を手に、スヴェトラーナが訳文を音読する。真向かいに腰掛けた、音楽家の友人がそれを聴き、気になる箇所について意見を差しはさむ。いくつか言葉がやり取りされたのち、彼女は原稿に訂正を書き入れる。そうやって一行ずつ、耳と手で、文章を練り上げてゆく。

窓から差し込む光が二人の横顔を照らし、質素で小さな机の上にはただ、二人の声とペンを走らせる音だけが漂っている。小説の言葉とはこんなにも緻密に組み立てられているものなのかと、改めて思い知らされる。

時折、荒ケズ(ア)りで半ば破たんし、鼻もちならないのになぜか魅力的な小説に出合う経験をする。そういう作品はどれほど乱暴に見えても、文章の隅々に神経が張り巡らされている。綿密に荒くケズられ、丁寧に破たんしている。しかし、文章自体が無神経な作品はどこか信用できない。結局は、見かけだけの薄っぺらなエネルギーを振りまいているにすぎない、という気がする。

小説における言葉の美しさとはつまり、一文一文、一語一語に対する慎重さに尽きるのだ。例えば、つむじ風のようなスピードで書かれた文章が、読む者を次々なぎ倒してゆくシッソウ(イ)感を生むわけではない。風を巻き起こそうと思ったら、一個一個、根気強く小石を積み上げ、途中、間違えたところをやり直し、崩れた箇所を修理しながら、空気の動きを微調整しなければならない。作業には、読者が味わうシッソウ感とは正反対の、足踏みの時間がうんざりするほどかかる。

同じ簡潔な一文でも、無意識にあっさり書かれたものより、混乱と逡巡(しゅんじゅん)の末にようやくたどり着いた文章の方が美しい。もちろん見た目には何も変わらない。途中の痕跡はきれいに消え去り、最初からこの姿でここに置かれていたのです、とでもいうようなさり気ない、しかし確固とした風情を漂わせている。にもかかわらず、やはり、残酷なほどに誤魔化しきれない違いが、そこにはある。何度もその一文に触れた、作者の指の体温が、言葉に奥行きを与え、そこにこだまする音の響きが美しさを生む。その美はこれ見よがしにこちらに迫ってくることなく、あえて美しいと名づけられることも求めないまま、言葉の連なりの陰に身を潜めている。【①】

A 小説の難しさと面白さは、理屈を超越した世界を、論理的な文法を持つ言葉で表現しなければならない点にあると思う。インタビューを受ける時、この小説の発想はどこから来たのですか、とよく質問されるのだが、いつも答えに困ってしまう。頭で考えられる範囲を逸脱したところで、作者にもコントロールできない何かが起こった、としか他に説明のしようがない。【②】

そして、頭の外側で発生した何かを、頭の中の言葉で書き写してゆく矛盾。この矛盾からは誰も逃れられない。もしかして世界のどこかには、言葉の論理に捕らわれず、感性だけで言葉があふれ出てくるような天才が存在するのだろうか。けれどそんな天才の書いた小説が、傑作になるとは限らない気がする。【③】

黄色い大きな月が向うに懸かっている。色計りで光がない。夜かと思うとそうでもないらしい。後の空には蒼白い光が流れている。日がくれたのか、夜が明けるのか解らない。黄色い月の面を蜻蛉が一匹浮く様に飛んだ。黒い影が月の面から消えたら、蜻蛉はどこへ行ったのか見えなくなってしまった。私は見果てもない広い原の真中に立っている。軀がびっしょりぬれて、尻尾の先からぽたぽたと雫がタ|れている。件の話は子供の折に聞いた事はあるけれども、自分がその件になろうとは思いもよらなかった。からだが牛で顔丈人間の浅間しい化物に生まれて、こんな所にぼんやり立っている。

ためらいすぎて何も書けなくなった時、私はしばしば内田百閒を読み返す。件という化物を目の前に差し出す見事な手つきに、［　X　］。ことさら怖がらせようなどと意気込みもせず、誰一人目にした例しもないはずの化物を、ありのままに存在させている。ほとんど素直とさえ言っていい文章に弛みはなく、無駄も不足もなく、件の輪郭をくっきりと描き出している。【④】

映画の中でスヴェトラーナ・ガイヤーは、テキスタイル（織物）とテキスト（文章）の語源は同じラテン語であるとし、文学は言葉の織物だと語っている。「件」はまさに、丁寧に織り上げられた一枚の布だ。糸はしなやかで、目は緻密で、時間と体温の重なりが織り込まれ、思わずうっとりしてしまいそうなのに、そこに浮かび上がっている模様は毒々しい。【⑤】

B 美しい文学は、読み手によって繰り返し解かれ、織り直される。そのたびごとに、糸の間に隠された秘密が発掘される。どうして今まで気づかなかったのだろうと不思議に思い、自分の迂闊さにあきれながら、その秘密を手にする時の喜びは、何ものにも代え難い。きっと作者自身でさえ、そこにそんな宝物が潜んでいるとは、気づいてもいないだろうから。

（小川洋子『遠慮深いうたた寝』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一　傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 19 、イが 20 、ウが 21 。

ア　ケズり

ⓐ 墜落機をソウサクする
ⓑ 精神がサクランする
ⓒ 労働者をサクシュする
ⓓ サクリャクをめぐらす
ⓔ 作文をテンサクする

イ　シッソウ

ⓐ 部下をシッセキする
ⓑ シッペイにかかる
ⓒ シッコクの闇に包まれる
ⓓ 院長がシットウする
ⓔ 条約がシッコウする

ウ　タれている

ⓐ ゴスイをむさぼる
ⓑ チュウスイエンになる
ⓒ 文学にシンスイする
ⓓ 職務をスイコウする
ⓔ 横綱にスイキョされる

問二　傍線部A「小説の難しさと面白さ」とあるが、これはどういう点にあるのか。その説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 22 。

ⓐ 自らの感性を限度いっぱいに発揮させて創造した特殊な世界を、客観的で一般的な言葉を用いることで表現するしかないという点。
ⓑ 自らの頭で考えられることを超越した内容を、試行錯誤を重ねながら、一語一語を丁寧に、時間をかけて組み立てていくという点。
ⓒ 半ばは破たんして、鼻もちならないのになぜか魅力的な作品があるように、なぜそれが魅力的なのかが解明されていないという点。
ⓓ 論理的な文法を持った言葉では表現できない内容を、論理に捕らわれずに、いかに言葉に奥行きを与えて表し出すのかという点。
ⓔ 自らでコントロールすることができない天から降ってきた何かを、ためらいながらも大胆に素早く言葉に紡いでいくという点。

問三　本文中には次の一文が脱落している。この文が入る箇所として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 23 。

言葉という道具の不自由さの前で立ちすくむ、書き手のためらいこそが、物語の密度を高めるのではと思うからだ。

ⓐ 【①】
ⓑ 【②】
ⓒ 【③】
ⓓ 【④】
ⓔ 【⑤】

問四　空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 24 。

ⓐ 肝を潰す
ⓑ 頬を膨らます
ⓒ 胸を焦(こ)がす
ⓓ 息を飲む
ⓔ 目が眩(くら)む

問五　傍線部B「美しい文学」とあるが、その説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 25 。

ⓐ　美しい文学は、感性だけで言葉があふれてくる天才によって書かれた、読み手には発掘しきれない秘密を持っている。

ⓑ　美しい文学は、内田百閒が件と呼んだ化物を内に持ち、読み手だけではなく作り手をもたぶらかしてしまうものである。

ⓒ　美しい文学は、論理的な言葉できちんと構築され、何の迷いもなく文章の隅々にまで神経を行き届かせたものである。

ⓓ　美しい文学は、一読目は思わずうっとりしてしまうのに、何度も読んでいるうちにそれが何かわからなくなってしまう。

ⓔ　美しい文学は、うんざりするほど時間と手間をかけて創作されているが、作者自身が気づいていないものも含んでいる。

問六　本文の表題として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 26 。

ⓐ　小説の神様に会いに行く

ⓑ　感性の鋭い音楽家の耳

ⓒ　繰り返し織り直される布

ⓓ　映画の中の芸術家たち

ⓔ　天才たちが描いた傑作